

支援者支援ワークショップ（仙台と福島を訪ねて） 支援者と被災者とともに

増野 肇

（ルーテル学院大学名誉教授・元心理劇学会理事長）

I はじめに

精神衛生学会が行っている被災地援助の一つとして、昨年の仙台に引き続いて、今年は4月の下旬に福島を訪れワークショップを行った。車窓から美しい満開の桜が目につき、遅い春がいっせいに到着しているのがうかがわれた。

最近人に知られるようになった花見山が見事だというので、ワークショップが始まる前にタクシーで訪れてみた。里山が、桜だけでなく、梅や桃、連翹などさまざまな花に埋もれていて、それも自然の風景だけでなく、生活感のある家々のたたずまいに囲まれているのが桃源郷と呼ばれるのに相応しい素晴らしいところであった。

このようにして「美し福島」を実感すればするほど、そこで起きている現状の厳しさを考えると言葉も出なくなる。慈恵医大の同窓の精神科病院でも、若い医師たちが福島を離れていて医師が足りなくなっているという厳しい状況があることを聞かされた。

II サイコドラマ

その福島で、過酷な状況下で働いているケアワーカーやボランティアの人たちを対象にサイコドラマを行って、少しでもリフレッシュできるようにすることが目的だった。サイコドラマにおけるイメージの力がどれだけ役立つか、仙台では、家族会の人を中心に、当事者の方も交えて、いい空間を作ることができて感謝された

ので、同じような方式で、イメージの世界からの活力を引き出すことを目的とした。

参加した人は17人ぐらいだったが、そのなかには20キロ以内の立ち入り禁止の地区の人が2人いた。最初に、参加した気持ちを一人ひとりが述べるのであるが、最初の一回りでは、どこのワークショップでも聞かされる不安や楽しみが語られる。しかし、2日目になると震災の話が語られるようになるのは、いわきや仙台でのワークショップと同じだった。

自己紹介のウォーミングアップの後に、「魔法のバイキング」という技法を用いて、現実から自由になり、イメージの世界での可能性を広げるドラマを組み立てた。「魔法のバイキング」は、これまで各地で行っていた「魔法のレストラン」を発展させたもので、仙台のワークショップで好評だった方法である。「魔法のレストラン」では、〈人前で緊張する〉とか、〈決断力がない〉といった課題を抱えた人に、残った人がシェフとなって、それを解決できる料理を提供するのである。フランス料理が希望なら、ペアに分かれた2人組が、ドリンク、前菜、メインディッシュ、スイーツ、エンターテインメントのどれかを担当して、緊張をほぐす美味しい料理を考えるのである。一人の人の課題に対して、全員がユーモアを交えながら対策を考えるところに意義があり、その代価としては、主役が持っている良いもの（やさしさとか笑顔）の一部をチップとして支払っていくという方法である。主役の課題を皆で考えるのと、主役のいいとこ

ろを見つけるということが可能になる。

それに対して「魔法のバイキング」では全員が、ペアに分かれて自分にとって必要な魔法の料理を作る。「情熱が湧いてくるトマトシチュー」とか「若返りができる唐揚げ」とか「粘りが出てくるむぎとろご飯」といった具合である。それを各人が好きなだけ食べ、そして、その結果どうなったかを皆さんに紹介することになる。それをオムニバスドラマにして、スケッチ風に演じてもらうのである。沖縄の海や網走の海岸で癒しを求める人、学会で発表を成功させる人、ボリビアでダンスに興じる人、ターシャの家を訪れる人など、さまざまなイメージが広がり、それを体験することになる。

過酷なアウシュビッツの生活の中で希望をイメージできた人が生き残ることができたというフランクルの報告にあるように、今回の震災の過酷な状況を乗り越えるには、豊かでないイメージを、グループの力を借りて作り出すことだと考えたからである。

最後のセッションでは、守護天使が出てきてサポートするいつものサイコドラマになった。主役の人のドラマの最後に、誰も見る人のいなくなったところで咲いている海辺の桜の名所を再現して、その桜たちからメッセージを送るサイコドラマになった。原発の20キロ以内にあるために、満開の桜を見ている人は今はなく淋しい思いをしているだろうが、イメージの世界では沢山の人が見ているのである。最後は、森山直太郎の「桜の歌」を皆で歌って、幕を閉じた。

III おわりに

何事もないかのような日常が始まっている福島で生きることが、どんな意味をもっているかを改めて深く感じる1日だった。感想の中にも、いつものサイコドラマのワークショップで見られる感想の他に、故郷への思いの強さや、記憶の中にある桜への思いが語られていた。

そんな訳で、丁度折りしも「劇団四季」が東北の支援活動として行っている「ユタと不思議な仲間たち」の公演を見たくなり、劇団四季をお願いをして、福島県での公演を見せてもらうことにした。

二本松の駅で降りて、南相馬への道の途中にある東和小学校を訪ねた。講堂に集まって目を輝かせている子どもたちを目の前にすると、その背景にある現状の厳しさに思いが至り胸がふさがる思いがする。

座敷わらしが登場して生きることの意味を伝え、少女さよちゃんが、どんなときでも自然は自分たちを見守ってくれていると歌う場面では涙が止まらなかった。福島が美しいだけに、その自然をぶち壊した原発の罪が重くのしかかってくる。

それに目を閉じて、再稼動に熱中する人たちは、座敷わらしやユタにどんな言葉をかけるつもりなのだろうか。子供たちと一緒に、サヨちゃんの歌を聞いて欲しいものだ。

参加者・アンケートより抜粋

- ・まだもやもやしているが新鮮な体験だった
- ・一体感で次の一歩になった
- ・皆のパワーをもらい自分の新たな夢に気づいた
- ・出合ったばかりの人とも心が通じ涙しパワーを感じた
- ・楽しさを共有する力を知った
- ・この充実した思いをこれからの臨床に生かしたい
- ・今日の自分を支援者の立場で生かしたい
- ・背負ってしまった現実の苦しさを surplus-reality のなかでの存在を大切にすることで繋がる時を待ちたい
- ・主役を守る雰囲気自然にでき上がる不思議な体験だった
- ・どの体験からも大きなエネルギーをもらい癒やしになった
- ・先生から丁寧な配慮の仕方を学んだ